

自然遊学館 だより

2015 AUTUMN

No.77



いざ! 成ヶ島へ

2015年8月29日、淡路島由良の連絡船で成ヶ島へ渡り、自然観察会を行いました。

2015. 11. 30 発行 貝塚市立自然遊学館

目次

*ネイチャーレポート

- スジチャダイゴケ …………… 岩崎 拓 …… 1
 ヤマトヌマエビとの再会 …………… 西川佑亮 …… 2
 ヤマトヌマエビの阪南市での記録

… 大阪府立泉鳥取高校フィールドワーク部 …… 3

*行事レポート

- ウミガメ産卵地見学と海辺の生物観察会Ⅰ
 ……湯浅幸子 …… 4
 ウミガメ産卵地見学と海辺の生物観察会Ⅱ
 ……湯浅幸子 …… 5
 近木川河口の生きものと遊ぼう! …… 山田浩二… 6
 虫と星の観察会Ⅰ …………… 岩崎 拓… 9
 近木川のアユを調べよう! …………… 山田浩二… 10

*泉州生きもの情報

- 貝塚市でカトウツケオグモを発見…… 布村和彦… 11
 セスジイバラウミウシ……山田浩二・和田太一… 12

*生きものがかり

- 遊学館で飼育している生きもの 4 ……鈴子勝也… 13

*自然生態園コーナー

- 自然生態園バッタ調べ2015 …………… 岩崎 拓… 14

*特別展報告

- 「アマモ場の生きものたち」の報告……山田浩二… 15

- *寄贈標本 …………… 17

- *スタッフ日誌 …………… 19

ネイチャーレポート

スジチャダイゴケ

2000年に作成された大阪府レッドリストは、2014年に改訂され、その際に、これまで扱われていなかった分類群がいくつか新たに加えられました。菌類もその一つです。自然遊学館が貝塚市で記録してきた菌類(キノコ)は230種を超えていますが、散発的な記録をまとめただけのものなので、本当の種数には遠く及ばないと思います。

新しい大阪府レッドリストの菌類の部では、絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)5種、絶滅危惧Ⅱ類(VU)22種、準絶滅危惧(NT)24種、情報不足(DD)9種がリストアップされています。絶滅危惧Ⅰ類と情報不足に関しては、自然遊学館の貝塚市産の記録にはありません。絶滅危惧Ⅱ類では、マツタケ(蕎原)、ナガエノホコリタケ(二色の浜)、ルリハツタケ(蕎原)、ショウロ(二色の浜)の4種が記録されていました。マツタケは自然遊学館のスタッフが採集したものではなく、寄贈されたものでもありません。市民の方が貝塚市役所に「大きなマツタケが採れた」と報告に来られたものを確認に行きました。傘の径が30cm近く、重さが約500gあり、新聞にも「ジャンボマツタケ」として紹介されたものです。

準絶滅危惧では、ブナノホソツクシタケ(蕎原)、ツキヨタケ(葛城山頂)、シロツルタケ(千石荘)、ウスキブナノミタケ(葛城山頂)、ハツタケ(二色の浜)の6種の記録があります。このうち、ツキヨタケは本誌34号と62号で、ウスキブナノミタケ

は本誌70号で紹介してきました。

本号で紹介するのは、2015年9月8日、馬場において確認された準絶滅危惧のスジチャダイゴケです(チャダイゴケ科チャダイゴケ属)。ただ、自然遊学館の記録にないだけであって、和泉葛城山の登山道での撮影記録はあり(吉田、2012)、その他にも、貝塚市域内での発生例が、専門誌や同好会誌等に報告されているかもしれません(例えば、ショウロとナガエノホコリタケに関する佐久間・上谷(2006))。

今回の発見場所は、広葉樹の林床です。小さな落枝からお椀のような形をしたキノコがいくつか生えているのを見つけました。腹菌類のチャダイゴケの仲間だとは分かったのですが、持ち帰って図鑑で調べて、殻皮(カップ)の内側に筋があるスジチャダイゴケだと分かりました(図1)。一番右の白い蓋で頂口が塞がれているのは若い菌です。もっと小さい完全に殻皮に覆われた幼菌もありました。

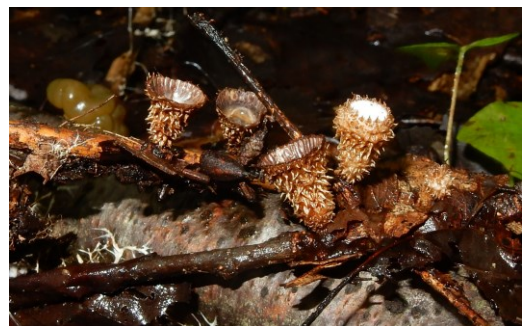


図1. 落枝から生えたスジチャダイゴケ

2日後に、落葉からも生えるのか、同じ場所に確かめに行きました(図2)。3個の「カップ」を採集した中では、小塊粒は8個が最高でしたが、もっと数が多いような

ので、いくつかは台から外に出てしまったのだと推測されます。孢子塊には糸が付いています。図3に示した糸は、湿ると粘性があるようです。



図2. 落葉から生えたスジチャダイゴケ
カップの中に小塊粒が見えています。



図3. スジチャダイゴケの小塊粒

右上の小塊粒から3 cm程度の「糸」が出ています。

林床の落枝に生えていたカップを、ネズミなどの小動物がひっくり返して小塊粒をまき散らすシーンを想像すると愉快だと思いましたが、小川真著『きのこの自然誌』の86頁に、同属のハタケチャダイゴケの小塊粒(ペリジオール)の飛ばし方が書かれていました。熟した小塊粒は水滴に弾け出されて1~2mも飛び、その際に先に粘り気のある糸が伸びて植物に付き、小塊粒がくさり鎌の分銅のような役目をして

植物に巻き付くそうです。さらに、そこで破れて胞子をまき散らす場合もあるし、その草が牛や馬に食われて分散させられることもあるそうです。

今回のスジチャダイゴケでも、カップに水滴をたらしてみましたが、弾け飛んだ小塊粒はありませんでした。小塊粒を割ってみた断面から判断して、まだ熟していなかったのかもしれませんが。

引用文献

- 小川 真 (2001) 『きのこの自然誌 (新装版)』、築地書館、244pp.
 佐久間大輔・上谷利明 (2006) 砂浜のキノコ。Nature Study 52(5):2.
 吉田元三郎 (2012) 山の中の小さなコップ? — ツネノチャダイゴケとスジチャダイゴケ。Melange 11(2):1.

(岩崎 拓)

ヤマトヌマエビとの再会

夏真っ盛りの暑い日に近木川の上流部へ涼みに行ってきました。この川ではちょうど2年前のお盆の時期に初めてヤマトヌマエビを見つけています(西川、2013)。その後も何度か訪れましたが、発見できずじまいでした。そして、この日は2年前と同じ時期に同じ場所へ行ってみました。晴れた日が続いていたおかげで水量が少なく、透明度も高いという探索には最適の状態でした。前回の発見の経験から水深の浅い石の下にいるだろうと考え、重点的に調べてみました(まあ、やることといたら

石をめくるだけですが・・・(笑))。

そして、15分後。諦めかけて何気なく石をめくってみると、いました。ヤマトヌマエビです！しかも、抱卵したメスが2匹もいました(図1)。“いや～、再会できればラッキーだな”という軽い気持ちで来たのですが、ばっちり収穫が得られました。ほっと安心して、さらにその周辺を探索すると次から次へと発見できました。メスはどれも抱卵しており、それ以外では一回り小さなオスも見つかりました(体の横の模様でオス・メスの見分けができるようです)。ここで懸命に生きています。ただ、気になったのは大人の個体ばかりだったということです。2年前の個体が生き残っていただけかもしれません。若い個体も探したのですが、残念ながら見つからずでした。

ヤマトヌマエビの生態は両側回遊型のため、卵から孵化したゾエア幼生が河口まで流れてそこで成長します。そしてエビの姿になってから上流部まで上ってきます。

そのため、この川に生息していることを確かなものにするためには、中流域又は上流域で若い個体を見つけることが必要だ



図1. 近木川に生息するヤマトヌマエビ

と考えています。その若い個体の発見を目標に、今後も継続的に調査していきたいと思えます。

【採集記録】

日時：2015年8月15日(土) 正午頃
場所：貝塚市近木川支流の稲谷川

引用文献

西川 佑亮(2013) ヤマトヌマエビの発見. 自然遊学館だよりNo. 69: 1.

(姫路市在住 西川 佑亮)

ヤマトヌマエビの阪南市での記録

2015年8月6日午前10時頃、阪南市山中溪の山中川で調査をしていて、ヤマトヌマエビを採集しました(図1)。桜並木の下で、草が覆いかぶさって流れが緩やかになっているところで、網ですくいました。当日は雨のあとでいつもより水量は多かったです。

以前から山中川・男里川の調査でヌマエビ類を見ているのですが、ミナミヌマエビとヤマトヌマエビの見分け方を知らなかったため、貝塚市立自然遊学館の山田さんに教えていただきました。ヤマトヌマエビは両側回遊で、どのくらい上流まで分布しているかを調べておられる方があるということでしたので、これまでの調査記録を見直してみました。写真が残っていて体の横の赤い破線のような模様が確認できたのは、2012年8月22日に今回と同じ山中

溪と、2011年7月11日に山中溪より下流、和泉鳥取駅の近くの下滑石田橋の2回でした。



図1. 山中川で採集したヤマトヌマエビ

(大阪府立泉鳥取高校フィールドワーク部)

行事レポート

ウミガメ産卵地見学と 海辺の生物観察会 I

日時：2015年8月1日（土）9：00～17：30

場所：和歌山県南部千里浜

参加者：46人

日本財団「海の学びミュージアムサポート」助成事業

今回は「海の学びサポート事業」の第2回企画—ウミガメ産卵地見学と観察会 I—、「海をきれいにするために自分たちでできることは何だろう」のテーマで、南部千里浜へと、貸切バスで出発しました。

貝塚市役所を9時に出発し、11時頃到着の予定でした。

バスでは、館長挨拶、行事概要説明に続き、講師の児嶋先生、河添先生に事前学習をしていただきました。児嶋先生は下見の時の貝を貼った絵皿標本を参加者に回し、説明していただきました。河添先生からは、

「アカウミガメは1回の産卵で何個くらいの卵を産むか？」などのウミガメクイズをまじえての話、また、1980年代に大阪府立貝塚南高校の生物部が行ったウミガメの観察ビデオなども見せて頂きました。

夏休み中の土日で、渋滞を心配しましたが、予定より30分遅れの11時半には到着。磯観察の説明の後、昼食を含む自由観察とし、13時集合となりました。磯では潮がひき、大小様々な潮だまりができていました。小さい潮だまりも深さのあるものが多く、色々な生きものが隠れていました。岩陰に隠れるようにウニがひっついていたり、魚の頭が見え隠れしたり。皆夢中で、あちこちから見て見て！の声が聞こえました。

13時から、貝、カニ、魚類、海藻などの説明がありました。



磯観察

当初、午後千里観音にむけ砂浜を移動しながら貝拾い等の観察をするという予定をたてていましたが、連日の猛暑のため、移動はバスにしました。

千里浜では、ウミガメが産卵するために上陸した跡がみられました。卵を保護するための囲いゲージも何カ所かありました。



ウミガメの卵保護ゲージ

ウミガメの産卵場所周辺には、青紫の花をつけたハマゴウが広がり、その後ろにはハマユウが咲いていました。足元には、大阪では絶滅といわれるネコノシタがあり、アゼトウナの株もみられました。

連日の猛暑が続いていたため、貝拾いの参加者からは「砂が熱くて歩けない。」との声もあり、早めにきりあげました。(その日の気温は 37.5℃だったそうです)



千里浜のウミガメのお話を聴く

15時から、日本ウミガメ協議会の田中さんが、ウミガメの産卵の話をしてくださいました。昼に眠り、夜ウミガメ上陸がないかを調べ、波打ち際や川べりなどに産みつけられた卵は移動、保護している話。子

ども達へのウミガメクイズなど。子どもたちは、バスでの事前学習の成果で、クイズは正解、また田中さんへの様々な質問ができました。

帰りのバスでは、家族ごとに採集した貝を袋にいれ、何種の貝がとれたかを児嶋先生がチェックしてくださいました。このあたりでよく見つかる貝は10種類ということでしたが、参加者の方の最高は6種類でした。帰りは渋滞にあうことなく、17時半に到着しました。

後日の話ですが、児嶋先生に自然遊学館に来て頂いて、貝の同定会をしました。

(湯浅 幸子)

ウミガメ産卵地見学と 海辺の生物観察会Ⅱ

日時：2015年8月29日(土) 8:30~19:00

場所：兵庫県淡路成ヶ島

参加者：48人

日本財団「海の学びミュージアムサポート」助成事業

「海の学びサポート事業」ーウミガメ産卵地見学と観察会Ⅱ一、「海をきれいにするために自分たちでできることは何だろう」のテーマで、今回は第3回目企画で、淡路成ヶ島へと、貸切バスで出発しました。

成ヶ島は淡路島東端に位置し、約3kmの砂州によって形成され、成山(標高50m)、塩沼湿地、砂礫海岸、砂浜など多様な環境のある小島です。

バスでは、部長挨拶、館長行事概要説明に続き、講師の児嶋先生に成ヶ島の貝、鍋

島先生に魚の話をしていただきました。

由良棧橋に11時到着、2回にわけて舟で成ヶ島に渡りました。乗船時間は5分もかかりません。



成ヶ島についてお話を聴く

成ヶ島では、地元在住で成ヶ島の自然保護活動をなさっている花野晃一さんから「成ヶ島は自然がよく保存され、色々な生物の棲家となっている。毎年、大量の打ち上げ漂着物がありゴミ清掃で困っているが、今年は台風がゴミを持ち去ってくれた。残念なことに、今年度のウミガメ産卵上陸が確認されていない。」などのお話しをしていただきました。

その後成山に登り、展望台からは成ヶ島の地形が一望できました。



成山展望台からの風景

芝生の広場に戻り昼食、ウミガメ産卵地の砂浜に移動、貝殻などを拾いました。

砂浜に向かう道には、ハマボウの並木があり、トベラ、クサスギカズラなども見る事ができました。



干潟で生きもの採集

次に干潟に移動。自由に生きもの採集をしました。ミミズハゼ、ゴンズイなどの魚、イシガニ、ウミウシ、海藻、貝のほか、海浜植物も観察でき、特に直接塩水をかぶる地形にはハマツナノ群落、ハマサジ、ホソバハマアカザ、ツルナ、ハマボスなどがありました。

採集した生きものの名前や話を聞いた後、乗船。16時に由良を出発、途中淡路サービスエリアで休憩、18時50分貝塚市役所に到着しました。

(湯浅 幸子)

近木川河口の生きものと遊ぼう！

日時：2015年9月12日(土) 10:00～15:30

場所：近木川河口

参加者：63人

日本財団「海の学びミュージアムサポート」助成事業

協力:大阪湾環境保全協議会

秋の海辺の生きものとふれあう観察会として、近木川の河口のヨシ原と前浜において行いました。メニューの1つであるカニ釣りは、長年にわたり継続している名物行事です。講師にスナガニ類の行動について研究している大島麻里さん、魚類の生態・分類を研究している松井彰子さんに来て頂きました。

午前中はヨシ原にすむカニたちを餌のたくわんで釣り上げるカニ釣りです(図1)。「始めてください!」の合図とともに、あちらこちらで早速、次々と釣れている様子でした。例年通り 50 分間釣ってもらい、釣れたカニはスタッフが種類、雌雄、甲幅を記録しました。記録作業をしている間、参加者にはハクセンシオマネキの生息している場所の前に移動してもらい、大島講師より解説を受けながら、ハクセンシオマネキウォッチングを楽しみました。



図1. カニ釣りのようす

カニ釣り大物ベスト3 近木川河口2015年9月12日

クロベンケイガニ		
合計 106個体 (平均甲幅29.5mm)		
甲幅(mm)	採集者	
♂1位 36.5	かわうえ あらた	
2位 36.0	たなか りんたろう	
3位 35.9	まつなみ ひかる	
♀1位 31.1	まつなみ ひかる	
2位 30.6	ひろの みつこ	
3位 30.0	みやつ ほか	

ハマガニ		
合計 116個体 (平均甲幅39.1mm)		
甲幅(mm)	採集者	
♂1位 52.6	かわうえ あらた	
2位 52.5	ふじわら ゆうき	
3位 52.0	しらが ゆめ	
♀1位 46.2	しらが ゆめ	
2位 46.1	しらが ゆめ	
3位 45.0	やまだ そうま	

アシハラガニ		
合計 9個体 (平均甲幅23.2mm)		
甲幅(mm)	採集者	
♂1位 30.4	みやつ ほか	
2位 27.1	やまだ りょうたろう	
2位 27.1	ふじわら ゆうき	
♀1位 24.7	やまだ そうま	
2位 19.8	やまだ そうま	

アカテガニ		
合計 1個体		
甲幅(mm)	採集者	
♀1位 22.9	とよやまりゆうや	

釣果はハマガニ 116 匹、クロベンケイガニ 106 匹、アシハラガニ 9 匹、アカテガニ 1 匹の計 232 匹でした。昨年に引き続き、200 匹以上の大漁でしたが、昨年最も釣れたアシハラガニはどのようなわけか激減でした。集計した後、各種の大物を釣り上げた人の発表と、ささやかな賞品が手渡されました。

海辺へ移動し、お昼休憩をはさんだ後、前浜の干潟で生きもの探しを行いました(図2)。この日は潮の引きがあまり良くななく、見つかる海岸動物の種類数は少なめでしたが、ヨウジウオの仲間のガンテンイシヨウジや、近木川河口では初記録となる二枚貝のオチバガイ(図3)が2個体採集されました。



図 2. 前浜にて生きもの採集



図 3. オチバガイ 左：外面、右：内面
(近木川河口産、殻長 27.0 mm、殻高 15.5 mm)

観察会のメは、お待ちかねのミニ地曳網を行いました。左岸側からの砂嘴が伸びた地形の状態のままになっているので、網入れが行いにくかったのですが、なんとか2回行いました。結果、計5種12個体ともの足りないものでしたが、姿のかわいいギマの幼魚や、松井講師も初めて見たという珍しいアジ科のミナマイケカツオの幼魚(図4)が入りました。最後に海辺で採集した生きものについて、講師より解説を受け、終了しました。この日確認した生きものについて、右の表にまとめました。下は地曳網で獲れたものの個体数を示した表です。



図 4. ミナマイケカツオ

近木川河口(前浜)で観察した海岸動物 2015年9月12日

		グループ	和名
刺胞動物門	花虫綱	イソギンチャク目	タテジマイソギンチャク
軟体動物門	腹足綱	ニシキウズガイ科	イシダタミ
		アマオブネガイ科	イシマキガイ
		タマガイ科	ツメタガイの卵のう
		アツキガイ科	イボニシ
		二枚貝綱	イタボガキ科
		チドリマスオ科	クチバガイ
		シオサザナミ科	オチバガイ
環形動物門	多毛綱	ゴカイ科	ゴカイ類
節足動物門	軟甲綱	テナガエビ科	スジエビモドキ
		ホンヤドカリ科	ユビナガホンヤドカリ
		ガザミ科	ガザミ
		モクスガニ科	ケフサイソガニ
			タカノケフサイソガニ
			ヒライソガニ
			コメツキガニ科
	オサガニ科	オサガニ	
脊索動物門	硬骨魚綱	ヨウジウオ科	ガンテンイシヨウジ
		ボラ科	ボラ
		アジ科	ミナマイケカツオ
		ヒラギ科	ヒラギ
		シマイサキ科	シマイサキ
		ハゼ科	イソミズハゼ
			マハゼ
			ヒメハゼ
			チチブ
			アイゴ科
	ギマ科	ギマ	

近木川河口地曳網(網入れ2回) 2015年9月12日

グループ	目	科	和名	個体数
魚類	スズキ目	アジ科	ミナマイケカツオ	5
		ヒラギ科	ヒラギ	1
		ハゼ科	マハゼ	1
		アイゴ科	アイゴ	1
フグ目	ギマ科	ギマ	4	
計				12

〔謝辞〕 オチバガイの同定、標本作成についてご協力頂きました児嶋 格さん、鈴子佐幸さんにお礼申し上げます。

(山田 浩二)

虫と星の観察会 I

日時：9月19日（土）18：00～20：00

場所：自然遊学館、市民の森

参加者：17人（+スタッフ7人）

一昨年から、善兵衛ランドと自然遊学館の共催で、「鳴く虫の声を聞き、星を観察する」行事を始めました。毎年、秋にそれぞれの館（周辺）で、鳴く虫と星の観察をします。自然遊学館で実施する分は、一昨年は10月下旬に行い、すでに鳴く虫が少なくなっていて、昨年は台風18号の影響で風が強く、鳴き声がほとんど聞こえませんでした。

今年は天気も良く、陽が沈まないうちからのスタートでも、カネタタキ、ハラオカメコオロギ、エンマコオロギ、マダラスズ、シバズズの鳴き声をすぐに聞くことができました。暗くなってからは、樹上でアオマツムシが鳴き始めました。今年は澤田義弘・智子夫妻に「採集係」として参加していただき（図1）、樹上性のアオマツムシやカネタタキも参加者に見てもらおうことが出来ました。



図1. 何がとれたかな？

市民の森のほぼ1回りした時に、ヒロバネカンタンの鳴き声がして、網を振ってもらったのですが、その網には、ホシササキリとオンブバッタが入っていました。その他、参加者の方がクビキリギス（幼虫）とショウリョウバッタを採集しました。

下の写真は、澤田夫妻が当日の午後に市民の森で採集したハラオカメコオロギです。自然遊学館の2階で、スライドを使って鳴く虫の説明をする前に、行事での採集物と一緒に、参加者に見てもらいました。



図2. ハラオカメコオロギのオス成虫
（体長13mm）

それから2階のテラスに行き、善兵衛ランドの森哲裕館長が夏の大三角形から説明していきます（図3）。善兵衛ランドから持参された望遠鏡を使って、月と土星の観察もしました。雲が少し出てきて、雲が途切れた間だけ見えるという状態でした。



図 3. 夏の大三角形を観察
(中央左が森哲裕館長)

その後、「ステラナビゲーション」というソフトを使用して、星座と太陽の位置関係、ペルセウス流星群や星雲の説明をしていただきました。

最後に、もう一度、2階のテラスに出て、夏の大三角形を形成するベガ（こと座）、デネブ（はくちょう座）、アルタイル（わし座）を望遠鏡で観察し、行事を終えました。

(岩崎 拓)

近木川のアユを調べよう！

日時：2015年9月26日（土）10:00～12:00

場所：近木川下流

参加者：32人

2011年から近木川の下流でアユの泳ぐ姿が多く目撃されるようになってきたのを受け、2012年から毎年秋に観察会として行い、今回で4回目になります。アユは寿命が1年の年魚ですので、毎年、春に稚アユが海から川へと遡上してきます。今年も

6月には多くの若アユの群れが近木川下流で目撃されていまして、大きくなったアユが見られるのではと期待が高まりました。

今回も講師にはアユ獲り名人こと河野通浩さんに来て頂き、男里川から持参頂いた朝獲りの生きたアユを参加者に見てもらうことから観察会が始まりました。川の透明度も良く、絶好の採集日和の中、さっそく、川に入っのタモ網での採集です。頃合いをみて、刺し網や投網も行い、次々に魚やエビなど様々な生きものが採集されました。約1時間をかけましたが、残念ながらアユの姿は誰も見かけないという結果に終わりました。



図 1. 近木川下流での採集

獲れた生きものは、最後にみなさんに見てもらい、種名等について講師から説明を受けました。ウナギやオイカワなど魚類14種のほか、甲殻類6種、貝、昆虫、カメ各1種が記録されました（表1）。今回採集されたヒナハゼ（図2）は全長2cm程の小さなハゼですが、近木川河口ではあまり記録がなく、貴重な標本となりました。



図 2. ヒナハゼ
(近木川下流、2015年9月26日)

表1. 近木川河口(新井井堰)で観察した動物 2015年9月26日

グループ		和名
軟体動物門	腹足綱 アマオブネガイ科	イシマキガイ
節足動物門	軟甲綱 スマエビ科	ミソレヌマエビ
	テナガエビ科	テナガエビ
	モクスガニ科	モクスガニ
		ケフサイソガニ
	ペンケイガニ科	アカテガニ
		クロペンケイガニ
	昆虫綱 アメンボ科	アメンボ
脊索動物門	硬骨魚綱 ウナギ科	ウナギ
	コイ科	オイカフ
	ボラ科	ボラ
	カダヤシ科	カダヤシ
	メダカ科	ミナミメダカ
	サンフィッシュ科	ブルーギル
	シマイサキ科	シマイサキ
	カワアナゴ科	カワアナゴ
	ハゼ科	マハゼ
		ヒメハゼ
		ヒナハゼ
		ヨクラクハゼ
		チチブ
		クサフグ
	フグ科	クサフグ
爬虫綱	ヌマガメ科	ミシシッピアカミミガメ

行事を終えて、参加されていたアドプトリバー堤の西出さんから「この前、家の近くで泳いでいた魚やけど、何でしょう？」と見せて頂いた写真には、なんとアユらしき姿が写っていました。館に戻り、昼食をすませた後、この写真の現場へ河野講師と高橋館長とともに直行しました。確かにいました。群れをなして泳ぐ姿がここにありました(図3)。この地点はもう少しで中流

になる、観察会を行った場所よりずいぶんと上流寄りに位置します。「ここまで遡上してきていたんだ」と、無事に成長してくれていたという安堵感とともにアユのたくましさを見た思いでした。



図 3. アユの群れ 近木川下流(貝塚市堤)

(山田 浩二)

泉州生きもの情報

貝塚市でカトウツケオグモを発見

2015年8月4日、友人の喜多理恵さんがいつも昆虫観察をしているという奥貝塚彩の谷「たわわ」へ、トンボ観察のために案内していただきました。

池でトンボを数種観察した後、ヒグラシが鳴く森の方へ分け入ると、目の前の葉の上にちょっと変わった蜘蛛を見つけました。蜘蛛に特別関心はなかったので良く見る前脚の長い蜘蛛のちょっと色が違う程度としか思いませんでしたが、喜多さんが「珍蜘蛛かもしれない」というので一応写真を撮っておきました。

帰ってから喜多さんが「七大珍種のカト

ウツケオグモだと思っ」と連絡があり、調べてみると確かにそのようです。詳しい方に聞いてもカトウツケオグモの雌で間違いないということで、自然遊学館の貝塚産クモ類リストにない珍しい種の発見となりました(図1)。翌日に喜多さんが同じ場所で撮影した写真もご覧ください(図2)。



図1. カトウツケオグモ♀
(貝塚市馬場、2015年8月4日撮影)
前の2対の脚を広げている様子です



図2. カトウツケオグモ♀
(貝塚市馬場、2015年8月5日、
喜多理恵さん撮影)
(左側：頭胸部；右側：腹部)

その後、私としては大阪府内での初見となるハチクマの飛翔も見れ、貝塚の自然を満喫出来ました。

[データ]

カトウツケオグモ *Phrynarachne katoi*

クモ目 カニグモ科

体長 ♀ 9~12mm

大阪府レッドリスト 「情報不足」

泉州地方では阪南市で2008年の記録がある


(Melange 8(2): 6-7)

(布村 和彦)

セスジイバラウミウシ

2015年8月15日、二色の浜に自生するアマモ場でシュノーケリングによる生きもの調査を行っていたところ、一見すると枯れた海藻のようなホンダワラコケムシという動物(外肛動物門^{がいこう})の群体を、あちらこちらで確認しました。このホンダワラコケムシを目を凝らして見てみると、体長1cmほどの小さなウミウシが多数付着していました。ホンダワラコケムシを好んで食べるネコジタウミウシ科のセスジイバラウミウシです。体色は半透明な白地に茶色の網目状の模様があり、こん棒状の突起が多数あります(図1、2)。けっこう派手な姿をしているのですが、ホンダワラコケムシの上を這っていると保護色になり、目立ちません。攻撃者から見つからないようにするための擬態と考えられます。

これまで二色の浜のウミウシの記録は、本誌のNo.50(山田、2009)などで紹介しましたが、セスジイバラウミウシは初記録となりました。

 いきものがかり

遊学館で飼育している生きもの4

展示ホールに入ってすぐの場所に汽水模型があったのですが、古く壊れかかっていたので、特別展のアマモ展で使っていた水槽を汽水模型の場所に移動することにしました。



図1. ホンダワラコケムシに付着する
セスジイバラウミウシ



図2. セスジイバラウミウシ

引用文献

山田 浩二 (2009) 二色の浜のウミウシ. 自然遊学館だよりNo. 50 : 12-16.

.....
セスジイバラウミウシ
学名 *Okenia pellucida*
軟体動物門 腹足綱 裸鰓目 ネコジタウミウシ科
.....

(山田 浩二、和田 太一)



上の写真の左側は、前まで使っていた汽水模型です。奥のタンクから水を溜め、水を汽水模型に流し込み満ち引きを再現していました。



次は新しく入れ替えた水槽で、寄贈された物です。二色浜周辺で見られる海の生きものを展示することにしました。季

節ごとにさまざまな生きものを展示していきこうと思います。

二色浜の生きもの水槽は、長さ 200cm、奥行き 70cm、高さ 68cm で現在、クロダイ、ヘダイ、アミメハギ、ギマを飼育しています。隠れて見つけにくいのですが、ヨウジウオも入っていますので、探してみてください。



おまけ

展示ホールの中央にある骨格標本を見て、「恐竜の骨」と言う方がいますが、本当はマゴンドウというクジラの骨です。自然遊学館開館時（1993年）に寄贈されたものです。体長 4.2メートル、体重は 1.09 トンもあったそうです。



(鈴子 勝也)

自然生態園コーナー

自然生態園バッタ調べ 2015

日時：9月9日（土）11：00～12：00

場所：自然生態園「バッタの原っぱ」

参加者：9人

今年も、市民の森公園（貝塚市二色）の一角につくられた自然生態園「バッタの原っぱ」において、森康貴先生の指導の下、自然遊学館わくわくクラブのメンバーによって、バッタ調べを行いました（図1）。「バッタの原っぱ」は、1999年に完成したビオトープで、2006年から9月にバッタ調べを行ってきました。



図1. バッタ調べの様子

9人で20分間、採集した結果を表1に示しました。1匹ごとに透明プラスチックカップに入れ、森先生が仕分けていくので、経過も分かりやすいですし、集計も楽です。結局、9種70個体のバッタ・コオロギ・キリギリスの仲間が採集されました。

表1. 自然生態園「バッタの原っぱ」のバッタ調べ

2015年9月12日 11:00~12:00 9人

同定: 森 康貴

科	種	成虫	幼虫
キリギリス科	ホシササキリ	2	9
	クビキリギリス		12
コオロギ科	エンマコオロギ	12	1
	ハラオカメコオロギ	6	1
ヒバリモドキ科	シバズ	3	7
	マダラスズ	1	5
バッタ科	ショウリョウバッタ	2	
	イボバッタ	1	
	マダラバッタ	4	4

ほか、チョウセンカマキリ(1♂1♀2幼虫)を採集。

採集前に、「シバズのような小さなコオロギにも注意しましょう」ということになり、結果はシバズとマダラスズとも、過去最多の個体数となりました。

イボバッタは2008年以来の確認ですが、いずれの年も1個体で、裸地に近い草地を好むものにとっては、「バッタの原っぱ」は草が多すぎるのかもしれませんが。

これまで毎年採集されていたオンブバッタが今年は採集されませんでした。昨年、初めて侵入種のアカハネオンブバッタが確認され、その次の年に両種とも採集されなくなったのは、興味深い結果です。

表2には、2006年以降の種数、個体数、優占種(=個体数が最多の種)を示しました。今回の優占種はエンマコオロギですが、クビキリギリスやホシササキリと大差はありません。

表2. バッタの原っぱで採集されたバッタ目の種数、個体数、および優占種

年	種数	個体数	優占種
2006	11	50	クビキリギリス
2007	12	58	クビキリギリス
2008	15	66	ハラオカメコオロギ
2009	8	61	マダラバッタ
2010	8	68	エンマコオロギ
2011	11	70	ホシササキリ
2012	11	73	マダラバッタ
2013	8	29	オンブバッタ
2014	10	61	ホシササキリ
2015	9	70	エンマコオロギ

最後に、採集したバッタやカマキリを逃がして、バッタ調べを終わりました。

(岩崎 拓)

特別展レポート

特別展「アマモ場の生きものたち ～二色の浜を調べてみよう!～」の報告

場所：貝塚市立自然遊学館多目的室

期間：2015年7月25日～8月31日

現在、大阪府の海岸でアマモが自生する最北端に位置するのが二色の浜です。かつて泉州地方の海岸では普通に見られたであろう海草ですが、昭和の高度成長期の頃には、海が汚れ、アマモの姿もいつしか見られなくなっていました。二色の浜でふたたびアマモが確認されたのは、平成17年になってからです(山田、2006)。大阪の海の汚れも徐々に改善され、それを裏付けるように泉州の海岸ではアマモ場が見ら

れるようになりました。

アマモ場の中は、魚類やエビ類、貝類などさまざまな小動物のよりどころとなり、またこれらの動物たちの産卵場所や稚魚の生育場にもなることが知られています。二色の浜のアマモ場には実際にどんな生きものたちがいるのか、平成26年、27年の両年にわたり和田太一さんらと調べてみた結果を主に紹介しました。



展示の様子

展示の目玉となったのは200cm×70cmの水槽でのアマモ場の生態展示です。造波装置を入れて、揺らめく波間にアマモが揺らめく様子を再現し、チヌやヘダイの幼魚、ヨウジウオなどを泳がせました。

アマモ場は多様な生息場所となっており、見つかった生きものを中心に写真パネルで紹介しました。

《アマモ葉上の生きもの》

ウミナメクジ、モロハタマキビ、チグサガイ、マツモウミウシ、コマユミノウミウシ、ミドリヒラムシ

《アマモ場内での生きもの》

ヒメイカ、ブドウガイ、ツノバネミノウミウシ、タツノオトシゴ、オクヨウジ

《アマモ場の海底の生きもの》

サンショウウニ、サンショウウニヤドリニナ、ネムグリガイ



アマモの分布調査の結果についても紹介しました。二色の浜でのアマモの被度を調べる調査では、スキューバを使用して6m×100mのライン上のアマモの生育の有無を記録するベルトトランセクト法を行いました。阪南市沿岸の分布調査は平成18年に上久保文貴 元当館館長が行った記録です。



阪南市のアマモを調べる上久保先生

また、阪南市鳥取の波有手の浜に生えるアマモの1年を追った絵本「波有手の海」(前田ゆきみ作)が、今年3月に発行されま

したので、この機に全頁をパネル展示して紹介しました。

陳列品としては、日本各地のアマモ場でみられる代表的な貝など12種の標本を児嶋格さん、大古場正さんの協力で展示しました。

特別展会場では常時放映として、二色の浜のアマモ場で今年7月に撮影した水中映像を大型モニターで映しました。

ワークショップコーナーではアマモ場の生きものスケッチ、ぬりえ、「竜宮の乙姫さまになろう」衣装を準備し、参加者に楽しんでもらいました。



「竜宮の乙姫さまになろう」コーナー

謝辞

本展の開催にあたり、以下の方々、機関にご協力を頂きました。記してお礼申し上げます。(敬称略)
 岩井 克己、上久保文貴、江本大地、大古場正、河原美也子、喜多悠香、児嶋 格、寺田拓真、傳 雅子、名倉やよい、西出康介、濱谷 巖、前田ゆきみ、三宅壽一、和田太一、大阪府栽培漁業センター、海藻おしば協会、二色の浜公園管理事務所、日本財団、三重県水産研究所

引用文献

山田 浩二 (2006) リュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ. 自然遊学館だよりNo. 40 : 8.

(山田 浩二)

寄贈標本

<菌類>

- ◆廣野光子さんより
ハツタケ 2点
貝塚市二色 2015年9月12日採集

<爬虫類>

- ◆鈴木司郎さんより
アオダイショウ 生体1点
貝塚市二色 2015年7月21日採集

<両生類>

- ◆柄本龍汰さんより
トノサマガエル 生体2点
貝塚市蕎原 2015年7月17日採集

<魚類>

- ◆岩崎翔汰・美咲さんより
ソウシハギ 生体1点
マツダイ 生体1点
貝塚市二色の浜 2015年8月2日採集

<軟体動物>

- ◆児嶋格さんより
ギュリキギセル 3点
阪南市貝掛 2015年9月10日採集

<節足動物>

- ◆岸和田市立光陽中学校科学部より
タイワンヒライソモドキ 2点
男里川河口 2015年5月23日採集
ヒメヒライソモドキ 1点 (図1)
男里川河口 2015年7月29日採集



図1. ヒメヒライソモドキ (右はさみ欠損)

- ◆畑のりん太ろう・はし本公太・
おりべあおぼさんより
ガザミ 生体1点
オサガニ 生体2点
貝塚市二色の浜 2015年7月15日採集
- ◆西出康介さんより
テナガコブシ 生体2点
泉佐野青空市場 2015年7月25日譲受
テナガコブシ 生体1点
フタホシイシガニ 生体1点
泉佐野青空市場 2015年7月30日譲受
ヒラコブシ 生体1点
テナガコブシ 生体1点
泉佐野青空市場 2015年9月2日譲受
- ◆中原光規さんより
アメリカザリガニ 生体2点
貝塚市麻生中 2015年8月5日採集
- ◆川口博さんより
ヒシガニ 生体1点
貝塚市二色の浜 2015年9月7日採集

<昆虫>

- ◆五藤武史さんより
センチコガネ 成虫1点
貝塚市蕎原 2015年5月3日採集
マイマイカブリ 成虫1点

岸和田市塔原 2015年5月20日採集

- ◆河添純子さんより
ヒョウタンゴミムシ 成虫1点
和歌山県南部町 2015年7月10日採集
- ◆中原光規さんより
ゴマダラカミキリ 成虫1点
貝塚市二色 2015年7月12日採集
チョウセンカマキリ 成虫7点
貝塚市二色 2015年9月23日採集
- ◆福島秀人さんより
フトアオメイガ 巢1点・幼虫3点
貝塚市二色 2015年7月27日採集
モモスズメ 幼虫1点
貝塚市二色 2015年8月28日採集
- ◆山田壮真さんより
キマダラカメムシ 成虫1点
高槻市玉川 2015年9月20日採集
- ◆西出康介さんより
ビロードスズメ 幼虫2点
貝塚市脇浜 2015年9月23日採集
チョウセンカマキリ 成虫1点
貝塚市脇浜 2015年9月26日採集
- ◆渡辺久和さんより
ハラビロカマキリ 成虫1点
貝塚市水間公園 2015年9月26日採集

<寄贈写真>

- ◆秋武仁志さんより
ウグイス 1枚
貝塚市馬場 2015年4月30日撮影
- ◆廣野光子さんより
アナグマ 3枚
貝塚市蕎原 2015年6月22日撮影
- ◆布村和彦さんより
カトウツケオグモ 1枚

ハチクマ 1枚

貝塚市馬場 2015年8月4日撮影

◆喜多理恵さんより

カトウツケオグモ 1枚

貝塚市馬場 2015年8月5日撮影

◆西出龍生さんより

アユ採集の様子 8枚

貝塚市堤 2015年9月26日撮影

<初鳴き情報>

◆五藤武史さんより

アブラゼミ

高石市 2015年7月20日



スタッフ日誌

7月9日、脇浜の田んぼを借りて、西小学校5年生150人と一緒に生きもの調べをしました。水生生物では、ヌマガエル（オタマモ）、ホウネンエビ、スクミリンゴガイ、ウスバキトンボのヤゴなどを採集しました。水面をすいすいと移動するのは、アメンボのほかに、キクヅキコモリグモもいました。田んぼの中に入らずに、畔から網ですくっただけでしたが、いろいろな生きものが採れました。（山・岩・鈴）

7月15日、朝一で大阪市内のダイビングショップにダイビング機材を借りに行き、午後から二色の浜でアマモの分布調査を高橋館長、寺田拓真さんの3名で行いました。浅場でしたが、本当に久しぶりのボンベを背負っての潜水調査でした。1時間程でしたが、結構な波で、ゆらり揺られて、波酔いしてしまいました。（山）

8月31日、東京上野にある国立科学博物館へGBIF（地球規模生物多様性情報機構）事業の研修に行ってきました。全国の博物館や大学などに所蔵している標本の整備や情報発信の現状と課題についてがテーマです。泉州地域の動植物標本が大半を占める当館の所蔵標本情報も、世界の誰もがネットを通じて閲覧できるよう徐々にデータ提供に努めています。（山）

9月27日、飼育展示しているアオダイショウが脱皮しました。殻の長さは約147cmありました。今年は6月26日が1回目で、今回が2回目です。昨年も6月と9月に脱皮しています。2個あるヘミペニスのうち腫れ上がった1個を切除してから（本誌70号）、4回脱皮したことになります。（岩）

* 自然遊学館だよりのバックナンバーは、下記のホームページよりご覧いただけます。

自然遊学館だより 2015 秋号 (No. 77)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/>

発行日 2015. 11. 30

この小冊子は市内印刷で作成しています。